

パブロ・ピカソ(1881-1973)『ピカソの自画像』(1932年、パリの国立ピカソ美術館蔵) (パリの国立ピカソ美術館蔵) © Vinciane Lebrun/Voyez-Vous, courtesy of the Musée National Picasso-Paris.



6.10 WED.—9.21 MON. 2026

休館日:毎週火曜日※ただし8月11日(火・祝)は開館、8月12日(水)は休館 ***CLOSED: TUESDAYS**

国立新美術館 企画展示室 2E (東京・六本木)

Picasso, through the Eyes of Paul Smith

ピカソ
meets
ポール・スミス
遊び心の冒険へ

「ピカソmeets ポール・スミス」展 開催のお知らせ

2026年6月10日(水)ー9月21日(月・祝)

国立新美術館(東京・六本木)

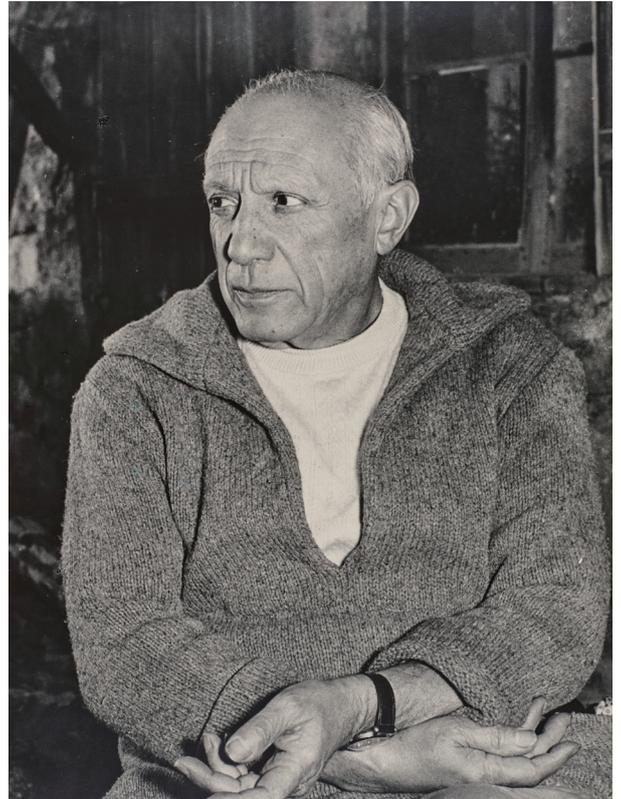
〔展覧会ご挨拶〕

パリ国立ピカソ美術館が所蔵する20世紀を代表する芸術家パブロ・ピカソ(1881-1973)の作品にインスピレーションを得て、英国人デザイナーのポール・スミスが会場のレイアウトを考案する、かつてない展覧会です。自由な発想で創り上げられた会場は、色鮮やかさと楽しい驚きに満ちています。「青の時代」の《男の肖像》や《アルルカンに扮したパウロ》などの代表作を含む約80点を緩やかな時系列で紹介します。本展は2023年パリで開催されたピカソ没後50周年記念の特別展「Picasso Celebration: The Collection in a New Light!」を基にした国際巡回展で、日本では国立新美術館のみで開催します。



パブロ・ピカソ

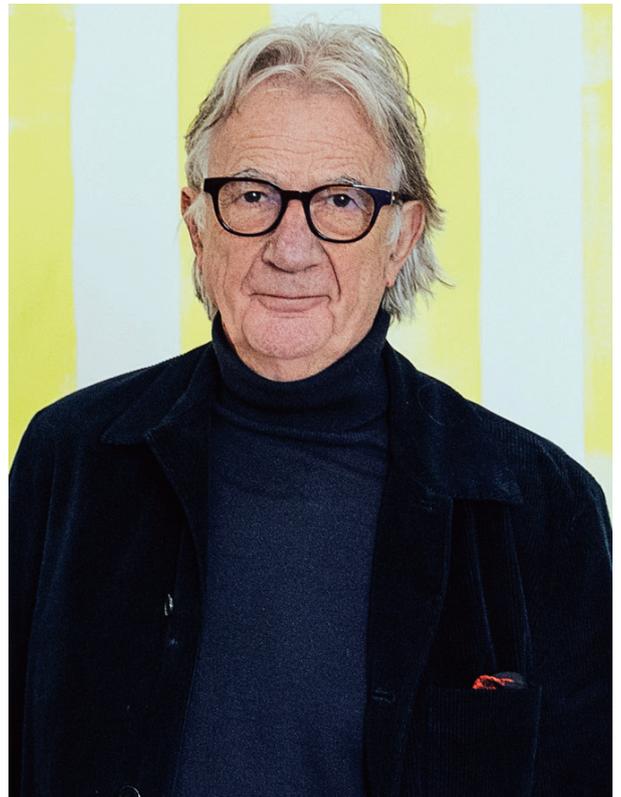
パブロ・ピカソ (1881-1973) は 20 世紀で最も影響力を持った芸術家の一人で、伝統的な絵画の概念を根底から覆した革新者として知られています。生涯を通じて作風を著しく変え、様式の特徴に従って、制作時期は「青の時代」や「バラ色の時代」などと呼ばれてしばしば区分されます。とりわけジョルジュ・ブラックと共に創始したキュビズムは、対象を複数の視点から解体して再構成し、絵画表現の新たな扉を開きました。この実験精神は傑作《アヴィニヨンの娘たち》(1907) として結実します。また絵画や彫刻だけでなく、陶芸や舞台芸術など多様な領域で作品を手掛けました。《ゲルニカ》(1937) に象徴されるように、社会的・政治的メッセージを込めた作品も多く、芸術家の社会的役割を確立しました。



1954年、ヴァロリスのマドゥラ工房中庭でのパブロ・ピカソ
© ADAGP, Paris
© GrandPalaisRmn (musée national Picasso-Paris) / Stéphane Maréchal / distributed by AMF

ポール・スミス

ポール・スミス (1946-) はイギリス・ノッティンガム出身のデザイナーです。10代後半まで熱心なサイクリストでしたが交通事故により競技生活を断念し、デザイン、音楽、ファッションの道を歩み始めました。豊かな色彩感覚と伝統的クラフツマンシップに独自のモダンな解釈を加えるスタイルで知られ、1970年に故郷で開いた小さなショップから始まったブランドの精神を今も体現しています。「ひねりのあるクラシック」という哲学は創作の核となり、この世界巡回展の基となった2023年の大規模なピカソ回顧展でもアート・ディレクションを担い、20万人以上の来場者を記録しました。



[本展の見どころ]

1 純度100%のピカソ展!

世界有数のコレクションが18年ぶり来日

世界で特に優れたピカソ・コレクションを持つパリ国立ピカソ美術館の所蔵品が来日。ピカソの初期を代表する青の時代の《男の肖像》から《アルルカンに扮したパウロ》など、作品約80点を緩やかな時系列に従って展覧します。



パリ国立ピカソ美術館外観
© Musée Picasso - Voyez-Vous (Chloe Vollmer-Lo) -8697

2 ポール・スミスがアート・ディレクター!

カラフルでポップな

遊び心あふれる会場演出

英国を代表するファッション・デザイナーのポール・スミスがピカソ作品からインスピレーションを得て各章ごとに全く異なるコンセプトで会場を作り上げます。その空間は時を経た二人のアーティストの出会いによる楽しい驚きに満ちています。



パブロ・ピカソ《読書》1932年、
パリ国立ピカソ美術館（パリ国立ピカソ美術館展示風景、2023年）
© Vinciane Lebrun/Voyez-Vous, courtesy of the Musée National Picasso-Paris.
[広報画像]

3 上海、オークランド(ニュージーランド)、東京、ソウルを巡回する世界規模の今までにないピカソ体験

本展は2023年にピカソ没後50周年を記念してパリ国立ピカソ美術館で開催された特別展「Picasso Celebration: The Collection in a New Light!」が基になった国際巡回展です。東京の国立新美術館が日本唯一の開催会場です。



[章立て紹介]

00 トロンプ・レスプリ (精神を欺くもの)

《牡牛の頭部》は自転車のサドルとハンドルという既製品を組み合わせ、牛の頭部を形づくった作品。これが牛の頭部なのか、あるいはサドルとハンドルなのか、鑑賞者の心に混乱を呼び起こします。ポール・スミスは青年期にはプロの自転車選手を目指していたほど、自転車を愛好しています。ピカソの本作に着想を得たスミスは、幾つもの自転車のサドルを用いて部屋のレイアウトを考案しました。



パブロ・ピカソ《牡牛の頭部》1942年、
パリ国立ピカソ美術館
© GrandPalaisRmn (musée national Picasso-Paris)
/ Mathieu Rabeau / distributed by AMF
[広報画像]

01 「ヴォーグ (流行)」中の芸術家

ピカソは子供のころから雑誌や漫画を愛読していました。その後は書物に絵をじかに描き込むようになり、バルザックやフロベールの小説のページに人物像をスケッチするようになります。こうした書物への描き込みは、1951年の雑誌『ヴォーグ・パリ』でも行われました。ピカソはウェディングドレスを纏う女性の写真の上いくつか線を加え、その姿を不条理かつグロテスクなものへと変えました。



02 青の憂鬱

1901年から1904年にかけて、ピカソは青を基調とした絵画を数多く制作しました。「青の時代」と呼ばれるこの時代は、親友カサジェマスの死を契機に始まりました。彼は社会の最貧困層を深い青で描き、孤独や憂鬱を表現しました。貧しい生活のなかで夜間にランプの下で制作された作品は、やがて憂鬱な雰囲気醸し出す独自の様式へと深化していきました。



パブロ・ピカソ《男の肖像》1902-1903年、パリ国立ピカソ美術館
© GrandPalaisRmn (musée national Picasso-Paris) / Mathieu Rabeau / distributed by AMF
[広報画像]

03 バラ色の女性たち

《アヴィニョンの娘たち》への前奏曲

1906年から1908年にかけて、ピカソは形態と空間の簡素化を追求し、キュビズムの基盤を築きました。彼はイベリア美術やアフリカ彫刻に着想を得て、バラ色を基調とした幾何学的で荒々しい新たな造形言語を模索しました。膨大な習作を経て完成した《アヴィニョンの娘たち》(1907年)において、鑑賞者を圧倒するような暴力的なまでの視覚的革新を成し遂げたのです。ここではその習作を中心に紹介します。



パブロ・ピカソ《女の胸像
(《アヴィニョンの娘たち》のための習作)》
1907年、パリ国立ピカソ美術館
© GrandPalaisRmn (musée national Picasso-Paris)
/ Adrien Didierjean / distributed by AMF
[広報画像]

04 キュビズムの実験室

1906年頃からピカソは、イベリア美術やアフリカ美術から影響を受けつつ、対象を立方体のように単純化するキュビズムという新たな表現に取り組みます。ピカソは最初、テーブル、グラス、新聞、楽器などの日用品を主題としました。限られた色彩で抽象的に描かれた画面は主題の識別が難しいときもありますが、モノや装飾、あるいは身体など、かならず手がかりとなる細部が取り込まれています。



05 アッサンブラージュとコラージュ

ピカソは日用品を実践に組み込み、芸術は忠実に現実を再現するものだという規範に対抗します。木や大理石などに似た壁紙をカンヴァスに貼り付け(コラージュ)、現実の断片を直接作品に取り込んだのです。このアイデアは二次元にとどまらず、三次元の表現にも及びました。スプーンや自転車のサドルなどの日用品で作られた作品がアッサンブラージュです。



[広報画像]

06 古典主義の画家

1910年代末から1920年代初頭にかけて、「秩序への回帰」という具象表現や古典的主題を復活させる風潮が芸術界に起こりました。こうした中で、1920年代にピカソはきわめて古典主義的な方法で、人物像を油彩とデッサンに描いています。妻でロシアのダンサーであったオルガ・コクローヴァや、息子パウロといった新しい家族がモデルに選ばれました。



パブロ・ピカソ
《アンドレ・ドランの肖像》
1919年、パリ国立ピカソ美術館
© GrandPalaisRmn (musée national
Picasso-Paris)/ Gabriel De Carvalho /
distributed by AMF



パブロ・ピカソ《初聖体拝領者たち》1919年、パリ国立ピカソ美術館
© GrandPalaisRmn (musée national Picasso-Paris)/ Adrien Didierjean / distributed by AMF

07 子ども時代

ピカソはスペインでの幼少期に親しんだ闘牛やフラメンコ、パリのキャバレーやサーカスの鑑賞体験を通じて、生涯にわたり舞台芸術に深い関心を持ち続けました。特にアルルカン（道化師）には自身を投影し、多くの作品の主題となりました。オルガ・コクローヴァとの息子パウロがアルルカンに扮した作品や、マリー＝テレーズ・ワルテルとの娘マヤを描いた作品などを紹介します。



[広報画像]



パブロ・ピカソ《アルルカンに扮したパウロ》
1924年、パリ国立ピカソ美術館
© GrandPalaisRmn (musée national
Picasso-Paris)/ Adrien Didierjean /
distributed by AMF

[広報画像]



パブロ・ピカソ《トラックの玩具で遊ぶ子ども》
1953年、パリ国立ピカソ美術館
© GrandPalaisRmn (musée national
Picasso-Paris)/ Adrien Didierjean /
distributed by AMF

[広報画像]

08 闘牛

ピカソは生涯を通じて闘牛を重要なテーマとし、その力強さに焦点を当て続けました。1930年代には牡牛が馬や闘牛士を襲う激しく悲劇的な瞬間を好んで描き、闘牛場を生と死、あるいは性と死が交錯する象徴的な劇場として表現しました。一方、ヴァロリスに滞在した戦後に制作した軽快な筆致の版画の連作〈ラ・タウロマキア〉では、闘牛の儀式の躍動感や祝祭性を巧みに捉えています。



パブロ・ピカソ《コリーダ：闘牛士の死》1933年、パリ国立ピカソ美術館
© GrandPalaisRmn (musée national Picasso-Paris) / Mathieu Rabeau / distributed by AMF
[広報画像]

09 ストライプ

1930年代にピカソはストライプ模様を実験的に用いて、愛する女性たちの肖像を描きました。柔らかな曲線とパステル調の色彩で描かれたマリー＝テレーズ・ワルテルは官能性と安らぎを象徴し、鋭角的な形と暖色で描かれたドラ・マールは強い存在感を示していました。しかし、スペイン内戦やファシズムの影が忍び寄ると、連作〈泣く女〉に代表されるように、戦争の苦しみや絶望を投影した哀愁的な表現へと変容します。



パブロ・ピカソ《読書》1932年、パリ国立ピカソ美術館
© GrandPalaisRmn (musée national Picasso-Paris) / Mathieu Rabeau / distributed by AMF
[広報画像]

10 戦時中

ピカソはスペイン内戦から第二次世界大戦にかけて、ファシズムや抑圧への抵抗を続けました。大作《ゲルニカ》(1937)は蛮行に対する告発の象徴です。ナチス占領下のパリで、不安と窮乏の中で、彼は「死」や「飢え」を暗示する作品を制作しました。肖像画では人体が歪められ、生者と死者が混ざり合うような非人間性を強調し、静物画では動物の死骸や頭蓋骨を暗い色調で描き人間の虚しさを表現しました。



パブロ・ピカソ《室内のフクロウ》1946年、パリ国立ピカソ美術館 [広報画像]
© GrandPalaisRmn(musée national Picasso-Paris) / Mathieu Rabeau / distributed by AMF

11 一点もの

ピカソは1940年代後半、南仏のヴァロリスに定住し、陶芸に没頭しました。主にマドゥラ工房で制作された数千点に及ぶ作品は、水差しや皿に、女神、鳥、動物、闘牛士のモチーフを、ユーモア溢れる方法で施しました。熟練の職人と協力した、絵画、彫刻、工芸の境界を曖昧にした陶芸の実験は、晩年の芸術活動において喜びと生命力に満ちた中心的な役割を果たしました。



パブロ・ピカソ
《表面に牧神の頭、裏面に花が装飾された長方形の陶器の皿》
1948年、
パリ国立ピカソ美術館
© GrandPalaisRmn
(musée national Picasso-Paris)
/ Adrien Didierjean / distributed by AMF
[広報画像]

12 《草上の昼食》

1950年代、ピカソは西洋美術の巨匠エドゥアール・マネの絵画《草上の昼食》(1863)の再解釈に取り組みました。27点の絵画や約140点のデッサンを含むこの連作において、彼は古典的な構図を解体し、人物の配置やポーズを大胆に変容し、絵画の平面性と装飾性を追求しました。この探求は三次元へと広がり、厚紙の模型をコンクリートで巨大化させた彫刻作品へと結実します。



パブロ・ピカソ
《草上の昼食(マネに基づく)》
1960年、
パリ国立ピカソ美術館
© GrandPalaisRmn
(musée national Picasso-Paris)
/ Mathieu Rabeau
/ distributed by AMF
[広報画像]



13 ピカソのボーダーシャツ

メディアで彼のイメージが本格的に固まったのは報道写真が興隆をきわめ、テレビが登場した第二次世界大戦後のことでした。すなわち白髪の薄い頭でボーダーシャツを着た男性、というイメージです。このイメージを決定的なものとした写真家ロベール・ドアンーによるポートレートは、ピカソが南仏のカヌヌやヴァロリスで陶芸に熱中していたころに撮影されました。



14 晩年：1969—1972

ピカソは1961年以後、南仏ムージャンで過ごし、ここでも精力的に絵画や版画の制作を続けました。最晩年の並外れた創造性と生産性は大きな特徴です。このころ彼は、以前よりも筆の動きが自由になり、人物像を好んで主題に取り上げました。晩年の作品でも衰えを見せない技量を見せつけ、これらの絵画は新世代の画家たちにも大きな影響を与えました。



15 展覧会のピカソ

ピカソのキャリアにおいて、数々の展覧会は彼の名声を世界的なものにする重要な役割を果たしました。1901年のパリでの初個展から、晩年の1970年のアヴィニョンでの大規模な個展に至るまで、展覧会ポスターは街中に掲げられることで芸術活動を大衆へ開放する役割を担いました。「ポスターの集積」に着想を得たスミスは、ピカソの膨大なエネルギーを象徴する展示空間を創出しました。



[広報画像]



パブロ・ピカソ《ボンボン帽子と柄ブラウスを着た女の肖像》
1962年、パリ国立ピカソ美術館

© GrandPalaisRmn (musée national Picasso-Paris) / Adrien Didierjean / distributed by AMF

- [開催概要]** 展覧会名: ピカソ meets ポール・スミス 遊び心の冒険へ
- 会期: 2026年6月10日(水)～9月21日(月・祝)
- 休館日: 毎週火曜日 ※ただし8月11日(火・祝)は開館、8月12日(水)は休館
- 開館時間: 10:00—18:00 ※毎週金・土曜日は20:00まで
※入場は閉館の30分前まで
- 会場: 国立新美術館 企画展示室2E
(〒106-8558 東京都港区六本木7-22-2)
- 主催: 国立新美術館、パリ国立ピカソ美術館、日本経済新聞社、
TBS、TBSグローディア、テレビ東京
- 協賛: アビームコンサルティング、DNP大日本印刷
- 後援: 在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ、
J-WAVE (81.3FM)、TBSラジオ
- お問合せ: 050-5541-8600 (ハローダイヤル)
- 展覧会公式
ウェブサイト: https://art.nikkei.com/picasso_ps26/
- 展覧会公式X: @PicassoPS26
- 国立新美術館
ウェブサイト: <https://www.nact.jp>
- 観覧料(税込): 一般¥2,400(¥2,200)、大学生¥1,400(¥1,200)、
高校生¥1,000(¥800)
- ※()内は前売料金
- ※中学生以下、または障害者手帳をご持参の方(付添の方1名含む)は入場無料
- ※7月29日(水)～31日(金)は高校生無料観覧日(学生証の提示が必要)

本展に関する報道関係者からのお問合せ先

ピカソ meets ポール・スミス 遊び心の冒険へ

広報事務局(ユース・プランニングセンター内)

担当: 芦田・片山・池袋

TEL: 03-6826-1245 FAX: 03-6821-8869

E-mail: pica-po2026@ypcpr.com

〒150-8551 東京都渋谷区桜丘町9-8 KN 渋谷3ビル 4F

※全ての作品: © 2026-Succession Pablo Picasso-BCF (JAPAN)

※全ての会場風景: パリ国立ピカソ美術館展示風景、2023年

フォトレジット © Vinciane Lebrun/Voyez-Vous,

courtesy of the Musée National Picasso-Paris.

※広報画像の貸出の詳細は広報事務局にお問合せください。